

人のやることには過剰な倫理観を求め、自分たちは官房機密費のバラマキを平気で受け取るのが日本のマスコミの倫理観である。ちょうど戦争賛美の記事を書き続け、戦後何の反省も責任も取らなかったのと同じ感覚ではないか。

昭和の時代になると、ゼロ戦や大和など

当時最先端をいく戦闘機や戦艦を自前でつくれるまでに、日本の技術水準は向上していった。不幸だったのは、世界政治の潮流が帝国主義にあつたことだろう。いまでは考えられないことだが、「植民地＝国家が生き残るための重要な経済安全保障戦略」という世界観があつたのは事実である。当時の日本も、一も二もなくその潮流に沿って国家戦略を打ち立ててしまった。

その結果、ついに世界の連合国を相手に戦争をはじめ、無残なまでの敗北を喫してしまった。首都東京をはじめ主要都市は焼け野原となり、広島・長崎は原爆投下によって灰燼に帰した。すべてを失った日本は、再びゼロからのスタートラインにつくことを余儀なくされるが、戦後日本は、そこから奇跡の復興を成し遂げる。

とくに昭和三十年代中盤に入ってから、全世界を驚かせる高度経済成長へと邁進していった。このときも、国家戦略とまではいえないものの、国民の気持ちを一つにする格好のスローガンがあつた。

「欧米に追いつき、追いこせ」である。

簡単にいえば、韓国政府の頭がよくて、日本政府の頭が悪いのである。

じつは、**韓国政府は、自国の映画やテレビドラマをほとんど無料でアジア各国に提供している。**これは、韓国政府が考えた「国策」なのだ。

話は一九九七年のアジア通貨危機に遡る。経済が大打撃を被ったことを受け、翌九八年に韓国大統領に就任した金大中(キムデジュン)氏は、文化を二十一世紀の最重要事業と位置づけたのである。その結果、韓国は文化輸出大国として急速に成長し、韓国の文化産品は世界市場で三・五%の売上を記録、あつという間に世界第五位の文化産業強国に躍り出た。

また、韓国の著作権法は、日本やアメリカとは異なり、ドラマや映画においては出演者や製作者には権利が一切存在せず、放映する会社で一括して放映権の管理が行なわれている。そのために放映許諾を取ることが比較的容易なため、数多くのドラマが商用ウェブサイトで配信されるという利点も見逃せない。

どの国のテレビ局も、番組を自社製作すればお金がかかるから、ほとんどタダの人気韓国ドラマがあれば、それを放映しようとするに決まっている。かくして、ベトナムでは『冬ソナ』のチェ・ジウの人气が高まり、若者たちのアイドルになったというわけだ。

重光昭夫さんとは縁があつて、もう二十年来のつき合いになる。

夕食の席で彼にこう聞かれた。

「堀さん、一つ教えてください。韓国では大統領が外国へ行くときには、私たち企業人がゾロゾロついていって一緒に売り込みをやるのに、日本では麻生さんでも菅さんでも、**総理大臣が外国へ出かけるときに企業人が一人もついていきませんよね。なぜですか？**」

つまり、一社やグループの利益につながる可能性があると感じたら、その延長線上に国民的利益があるとしても、それを否定したり抑圧することがマスコミの使命であるかのように考える傾向が強すぎる。

まさに、ここなのである。私は苦笑いで答えるしかなかった。

「日本ではね、そういうことをやると官民癒着だとマスコミが批難するから、みんな怖がって誰もついていけないんだよ」

「はあ、余裕がありますねえ」

私は恥ずかしかつた。もちろん、余裕などではないからである。相も変わらずこん

なことをやっているから、日本は世界の中での地位がどんどん後退していくのだ。これはもう、マスコミの弊害以外の何物でもない。

日本のマスコミは、パブロフの犬のように何も考えずワンパターンの反応を示す。

まるで、記事の書き方の雛形があらかじめ決まっているかのようだ。私も元読売新聞の記者だから、できれば古巣の批判などしたくはないが、ちょっとひどすぎると思うのである。戦前・戦中ではもっとも過激に戦争遂行の旗を振り、戦後は一転、国がすることにはとりあえずぜんぶ反対すると決めているかのような新聞社もある。

私は彼らの戦争責任は三井・三菱以上にあったと思う。鬼畜米英なんて発想を国民が待ったのは、三井・三菱のせいではなく、朝日新聞やNHK ラジオの責任である。

私はまず、企業間競争の時代はもう終わった、と思っている。

企業と企業が競争していたのは二十世紀までの物語だ。企業と企業が競争する資本主義という概念は帝国主義や軍国主義同様に時代遅れだと思う。それはいまや歴史上の概念にすぎない。そして、二十一世紀は再び新たな国家間競争の時代になると思うのである。

ちょうど十九世紀が、違ったかたちでの国家間競争の時代だった。帝国主義の下、植民地支配が横行し、欧米列強が世界中を次々に分割支配していった時代だ。アジアやアフリカなどは、そのほとんどが欧米列強の植民地にされてしまった。

二十一世紀の国家間競争は、武力を伴わず、世界地図の塗り替えも行なわれない、**経済面における各国のせめぎ合い**である。

この新たな国家間競争に備えて、アメリカは早くも二十世紀末から、強力な武器を二つ繰り出してきた。一つはインターネットであり、もう一つが IT を駆使した金融工学である。**金融工学のほうは武器として強力すぎて、自家中毒を起こしてしまった**感があるが、アメリカがインターネットと金融工学で二十一世紀初頭を席卷した事実には変わりはない。

たとえば、日本の兜町などは、いまやアメリカ資本主義の奴隷と化してしまった。

兜町の売買の六割は外国資本が占めている。日経平均の先物に占める外国資本の比率はもっと高い。そして、その先物が現物の価格を動かすのだから、日本の証券会社は彼らの意向をうかがいながら右へ左へと動き回る金魚のフン状態になっている。金魚のフンは、金魚から離れずについて回るしか生きる術がない。日本の銀行や証券が浮上する可能性は、いまのところ完全に断たれている。

若いときは、裕福か貧乏かはまったく関係ないのである。それよりも、覇気とか気概といった精神的なパワーが、未来を大きく左右するのだ。徒手空拳の身であっても、やる気と信念に努力が加われば、たいていのハンディは掛ね返せるものである。

学校というのは、英語を教えられない英語教師に六十歳まで給料を支払うための機関ではないのである。

文部科学省も日教組も、朝日新聞も NHK も、この一点をまったく理解していないように見える。とくに日教組の主張は、すべてが「それでは教師が困る」という立場からくるものだ。感心するくらいに児童・生徒・学生の迷惑を考慮に入れていない。

学校は、あくまで明日の日本を支える世代に学力をつけるための組織なのである。

日教組が考えるような、学校は第一に教師が生活の糧を得る場所では断じてない。もし日教組が教育の意味を理解しているのなら、児童や生徒のためにならない教師は、むしろ日教組自らが率先して排除していくのがほんとうの姿ではないか。

いまのように、児童・生徒・学生の将来を露ほども考えることなく、教師の生活、いや、この際だから露骨にいわせていただくが、教師の**既得権益を守るのに血道を上げるだけの組織**であり続けるなら、日教組など害になるだけだ。ただちに自主解散していただきたいと思う。

いまマスコミに引っ張りだこの女性エコノミストがいる。彼女の人気の源は何かと考えると、複数の国家資格を有していることと、二度離婚しながら子どもを育ててきたということだろうか。

もう一つ、彼女が著名を外資系のコンサルティング会社やインベストメントバンクに勤めていた経験も「売り」になっているようだが、こちらは失礼ながら疑問符である。なぜなら、どちらの業界も、わずか三、四年しか勤めていないというのは仕事ができなかったという証明以外の何物でもない。プロフェッショナルファームとは最低七年は勤めなければ「給料泥棒」と呼ばれる世界であり、わずか三、四年で多少の実範を残すことは不可能な世界であるからだ。

その代わりに、彼女は努力して資格を取った。私はそんな彼女を努力家として尊敬する。しかし、それを華麗な職歴として見る日本のマスコミの常識のなさにはついていけない。太平洋戦争を賛美していたのと同じくらいバランス感覚のない話である。転職とはいつの時代でも、洋の東西を問わず、まずは前の職場でうまくいかなかったから次に変わったと考えるほうがまともである。

改めていう。大学の法学部、経済学部、社会学部、文学部などはいらない。

ただし、これをぜんぶやめてしまうのかといえば、そうではない。法律や経済の勉強をしたい人は、三年間の理系大学を出た後に大学院で学べばいい。法律大学院とか経済人学院に進み、二年間の修士課程で学べばいいのである。

いまの文系大学でやっている講義は、申しわけないが、たいして意味も価値もない。少なくとも、ビジネスの世界では何の役にも立たない。

...

逆に、理系大学であれば専攻は何を選ぼうとかまわない。

理系であれば、学部が何であれ、必ず数学を学ぶことになる。この数学が重要なのだ。数学は論理学だと考えればいい。論理学はすべての学問の基礎である。ビジネスの世界に入ってからでも必要不可欠だ。論理構成力のないビジネスマンは絶対に大成しない。

法律や経済で論理思考が学べないわけではないが、ある前提の下で仮説を立てて検証を加えるといった訓練で徹底的にロジックを鍛えるには、数学のほうがはるかに向いている。

それに、理系大学を出てから文系大学院に行くと、驚くほどの学習効果が期待できるはずだ。パターンは違うが、私は現役のビジネスマンとして三十二歳でハーバードビジネススクールに行ったとき、同じような経験をした。その結果、学校を卒業して会社に戻ってからも、学ぶことが大好きになったのである。

念のために書いておきたいが、中国が原子力空母をつくる真の目的は、台湾や日本への侵略ではない。抑止力である。では、横須賀や佐世保にいる第七艦隊、沖縄にいる海兵隊は何のためにいるのかというと、これまた抑止力のためである。

こう議論をしていくと、「では抑止力とは何か？」となる。私は抑止力というのは、相手にためらいが出て行動に移りにくくすることだと考える。だから、アメリカからみると、第七艦隊と海兵隊が日本にいないといけない。

一方、中国からみると、原子力潜水艦がときどき沖縄の海に出没しなくてはならないし、原子力空母なんてとんでもない高額な戦艦もつくらなくてはならないのだ。

金融資本主義の猛威。いまは一時的におとなしくしているが、彼らの本質は変わっていないし、また反省もしていない。必ずまた台頭してきて猛威を振るう。そのとき日本は何もできない。銀行も証券も、頭を低くして彼らの猛威が去るのを待つだけだ。

唯一の対抗手段は、なるべく彼らに関わらないことである。

せめて、オバマ大統領やヨーロッパ諸国が何らかの動きを見せたときに、日本も応援するか、一緒にやらせてくれと手を挙げる。それ以上のことはできないし、やって

はいけない。間違っても、先頭に立って金融資本主義と戦うような気は起こさないことだ。

金融資本主義は、すなわちユダヤの哲学である。

アメリカは多民族国家だが、基本的にユダヤ人でないと力を持ってない。もはやアングロサクソンの国ではなくなっている。アメリカでは、金融だけでなく、石油も流通もユダヤ人が完全に押さえている。ヨーロッパの金融も同様である。ロスチャイルド家がイギリスとフランスに跨って根を下ろし、ヨーロッパの金融を完全に牛耳っている。また、世界中のダイヤモンドは歴史的にユダヤ人の占有品だ。彼らは、ユダヤ人以外のルートでダイヤモンドが流通するのを決して許さない。

・・・

ユダヤ人は世界中に散らばっている。アメリカの首脳や上層部もユダヤ、あるいはユダヤの影響を強く受けている人たちだ。アメリカの世界戦略を考えているのも間違いなくユダヤだから、**アメリカはユダヤそのもの**といっても大きな間違いではない（アメリカ人でも大多数の一般国民は別で、彼らはいってみれば日本の庶民と変わらない）。
こんな**ユダヤ人に対抗できるのは、世界広しといえども中国人だけ**である。

・・・

私たちは、**ユダヤ人と中国人がどういう人たちなのか、よくよく肝に銘じておく必要がある**。彼らに対する認識が、日本ではまだまだ甘いと思う。

たとえば、中東の対イスラエル問題について、朝日新聞などが能天気にも「もっとよく話し合え」と書いたりする。

バカなことを書くものだ。あれは話し合っ解決するような問題ではない。ユダヤ人の歴史を少しでも齧った人なら、そんなことは誰でもわかるはずである。

日本人は、よく話し合えば何事も解決すると思っている。これはこれで、日本の歴史が生んだ伝統である。

・・・

しかし、何でも話し合いで解決すると思っているのは日本人だけだし、日本の内だけの話である。

とくにユダヤ人は、日本とは比べものにならない過酷な歴史を生き抜いてきている。彼らは、この世が「**食うか食われるか**」の**食物連鎖の論理**でできていることを、世界でいちばんよく理解している人たちなのだ。

ユダヤ人は第二次世界大戦彼のイスラエル建国まで国を持たなかった。

バビロン捕囚（B. C. 五九七年）から数えたとすると、二千五百年余りも流浪の民として生きたことになる。彼らのすごいところは、それでもアイデンティティーを失わなかったことである。ふつうどんな民族でも、二千五百年間も世界各地に散らばって暮らしていれば、民族的アイデンティティーなどいつしか失われてしまうものだろう。

そして、彼らはじつにしたたかだ。何をされても、しぶとく生きぬく。絶対に死なない。

世界中に散らばった彼らは、生きるためには何でもしてきた。

やがて、いつの間にかヨーロッパの金融を押さえてしまう。シェークスピアの『ヴェニスの商人』におけるシャイロックの表現をみると、彼らに対する蔑視が露骨に表れている。**戦争ビジネスもさんざんやってきた。さかんに情報を収集し、勝つと思つたほうに投資して大金を稼ぐ。**

一方で、ずっと迫害され続けた。

ナチスによる「夜と霧」作戦では、数百万人ものユダヤ人がガス室に送られて殺されている。それでも黙っては引き下がらない。じつは第一次世界大戦中の一九一七年、オスマン帝国と戦っていたイギリスが、ユダヤ人に、戦争に協力することを条件にユダヤ人国家の建設の約束をした（バルフォア宣言）。実際は空約束だったのだが、ユダヤ人たちは、この約束をたてに**現在のイスラエルの地に集結し、強引に建国した**。

建国したといっても、そこには二千年以上前から先住していた人たちがいる。そこへ、いきなり武装したユダヤ人たちが乗り込んできて「今日からここはオレたちの国だ」と宣言した。二千五百年前はオレたちの国だったといわれても、そんなことを納得できるはずがない。

ここでも、ユダヤ人たちは存分にしたたかさを発揮する。

第一に、国連に強力に働きかけて**イスラエルの建国を認めるという決議**を取りつけ

た。

第二に、**水を押さえる**。軍隊を増強してゴラン高原にある水源を確保した。いまでもイスラエルは、あの地域の水の九割を支配している。砂漠では何より水が大事なのだ。いくら石油が出たところで、動物も植物も水がなくては生きていけない。もっとも、飲料水など日常生活に必要な量はたかが知れている。大量に必要なのは農業用水だ。

さらに、工業を興せば農業用水の三倍の水がいる。

彼らに水を押さえられたパレスチナ人たちは、生活用水くらいは確保できても農業用水、まして工業用水まではとても賄えない。結果、繁栄するのはイスラエルばかりで、パレスチナの人たちは口惜しさを噛み締めながら貧しい生活に甘んじざるをえないのが現状だ。

この水の支配ないしは分配を変えないかぎり、イスラエル・パレスチナ問題は解決しないのである。

対して日本人は、ここにちゃんと祖国がある。歴史を見ても、元寇で九州沿岸を少し侵されたくらいで、近代まで外国からの脅威を経験したことがない。世界史上でも珍しい平穏な国だった。だから、日本人には危機管理意識の DNA が著しく欠けている。

ユダヤ産の金融資本主義に手もなく呑み込まれたのも、口惜しいが持って生まれた宿命的一面もあるのだ。

いずれにせよ日本は、もう金融資本主義には絶対に手を出してはいけない。勝負はやはり得意分野の得意技ですべきなのだ。まずは**産業資本主義に徹する**。そして、**技術力と経営力で勝負する**。改めて強調しておくが、ここでしか日本は生き残れないのである。

中国も恐ろしい国だ。

・・・

ここまで中国が復活してきてしまうと、東アジアにおけるアメリカの影響力は、当然ながら相対的に弱くなっていく。

躍起になってアメリカ軍を日本から追い出そうとしている人たちは、この明らかなパワーバランスの変化が見えていないとみえる。逆に押し倒して頼んででも、アメリカ軍には東アジア周辺に駐屯してもらわなければならないのだ。それが**中国への大きな牽制**となる。

危機管理の DNA に欠ける政治家やマスコミたちは、もっと「**日本が中国に食われてしまう**」という視点でものごとを考えたほうがいい。

たとえば、いま**中国が日本の水を着々と押さえにかかっている**。水そのものがある場所、山林だ。山の木は水を一貯えるから、中国は日本の山林を静かに買い進んでいる。何をしようとしているのか私などは不気味で仕方がないが、水に目をつける場所は、パレスチナにおけるイスラエルの占領戦略とまったく同じだ。

近隣諸国を食うのは、もともと中国三千年の伝統的価値観なのである。

アジア大陸にある国々で、中国に支配されなかった国はない。いまでも、内モンゴルは中国の一部である。チベットやネパールも事実上中国の支配下で、亡命中のダライ・ラマがアメリカへ行くと露骨に不快感を表明する。西方を向けば、目が青くて金髪の人たちにまで、中国語を喋らせている。

日本人がお人好しの DNA から逃れられないように、中国は中華思想の DNA によって近隣諸国を支配する衝動を抑えることができない。

歴史的な国家的悲願や DNA というのは、そうそう変わらないのである。たとえば、もう一つの大国ロシアの国家的悲願は不凍港だ。冬でも凍らない港を持って、そこにロシアの艦隊を置きたい。そのためロシアは、ソ連になる以前から南下政策をとってきた。

ロシアのウラジオストック港は、旧満州の一部だった土地を、一八六〇年の北京条約で中国（当時は清）から獲得してつた港だ。その喜びは大きく、ウラジオストック（ときに「東を支配せよ」と訳される）なる物騒な名前がつけられた。

巨大化した中国が出現した東アジアでは、日本一国でいたら独立を保つのが難し

い。

そこで、日本と同じく中国に脅威を感じている韓国、台湾、ベトナム、カンボジア、ラオスなどと、連携を強化していく必要がある。台湾はもとより、**韓国やベトナムは歴史的にずっと中国の脅威を感じ続けてきた国**だ。危機感は日本人が想像できないほど大きいし、中国の脅威をどうかわせばいいかもよく知っている。

また、いざとなれば支配のされ方も、忍従の仕方もよく心得ている。

ただ、これらの国にフィリピン、マレーシア、インドネシアまで加えて「非中国アジア連合」をつくることができれば、中国もうかつには手を出せないはずだ。